

【特集】 高等部教育をめぐる今日的論点

特集にあたって

本誌編集委員 佐藤比呂二

職業自立100%を目標に掲げた特別支援学校高等部に入学した女の子。入学時のアンケートで、自分の夢の欄に「マンガ家」と書いていたが、1年後にはその夢は「物流」に変わっていた。もちろん、夢は変わったってよい。マンガ家と物流の善し悪しも問わない。ただ、物流を夢という彼女の心には、マンガ家を夢見ていたときと同じような憧れがあるのだろうか。

1980年代後半、全国に広がった高等部希望者全員入学の運動は、「花開け！15の春」をスローガンに、それまで「障害が重い子は高校に行けなくても当たり前」だった時代から、「どんなに障害が重い子にも望む者にはすべて権利としての豊かな高等部教育を保障することが当たり前」の時代へと発展させてきた。しかし、そこから20年を経た今、新たな課題に直面している。

本特集「高等部教育をめぐる今日的論点」では、これまでの到達点を押さえた上で、新たな課題について整理し、障害児の本当に豊かな青年期教育とはどうあるべきかということについて検討している。

高等部生徒の増加による過大過密、高校の中の分校・分教室等の形態の多様化への評価、軽度の生徒の増加と実態の多様化による実践上の課題等が挙げられているが、中でも、職業自立をめざすことを最大の目標とした職業教育偏重の教育内容が、これまで獲得してきた障害児の豊かな青年期教育を危機にさらしている現状は看過できない。

自分と社会の主人公になるための全面発達をめざすべき高校時代に、軽度の生徒を対象に職業教育を全面に打ち出し、挨拶や特定の能力の獲得が直接的な指導として持ち込まれている。高等部進学に際しては、高倍率の選抜による激しい競争原理が持ち込まれ、子どもの発達にゆがみを生じさせる危険も指摘されている。

だからこそ、競争原理・成果主義の職業自立のみに特化した高等部教育に対しては、自らの生き方を自分で選ぶ進路指導や自己肯定感とわかる喜びを感じられる授業づくり等、夢や憧れを育む豊かな人格形成をめざした実践をもって、きっぱり「NO!」を突きつけたい。

特集後半に掲載されている3本の実践については、子どもが自分自身に向き合い、ありのままを良いと思え、自分づくりをする中で人格を育てていくこと、また、教師はその子どもの事実に学び、ときに自らの価値観をも変えることができるかどうか問われること等、多くのことを考えさせられる。様々な角度から検討し、学びの糧としていただきたい。

自分さがし、自分づくりにじっくりと時間を割くことができ、高校生らしく青春を謳歌できる青年期教育を実現しよう。「ゆっくり大人になりなさい」と心から言える、それが当たり前になるように。

さあ、彼らの青春を輝かせるために、ページをめくってほしい。(さとうひろじ 特別支援学校教員)